特集　アイデアと工夫で支援の幅を広げ、地域での暮らしやすさを高める

社会福祉法人　清光会　理事長　**山田 千秋**（障害－29期、№3902）
支援部長、放課後等デイサービス 希望のひかり 児童発達支援管理責任者
松田 貴義

1．障害のある人の生活支援の幅を広げる ～設立から今日まで

私たちの組織は、1978（昭和53）年に厚生省（当時）より社会福祉法人設立の認可を受け、神奈川県三浦半島で初となる知的障害者授産施設（通所）「清光園」を開設し、「しめじ栽培」と「洗濯業務」という二つの事業からスタートした。その後、高齢化社会の急進も考慮した新しい施設の創設が求められるようになり、1995（平成7）年4月より「知的障害者更生施設　清光ホーム」を開所している。

時は流れて平成20年頃、当時の横須賀市には、障害児を対象にしたデイサービスは小学生までしかなく、中学・高校生を受け入れてくれる場所がなかった。市内の病院のケースワーカーからの相談をきっかけに、清光ホームにおいて障害児の受入れをはじめた。その後、利用希望者が多くなり、2011（平成23年）5月より、清光園に日中一時支援事業所「希望のひかり」を開所し、その後の児童福祉法の改正を受けて2013（平成25）年2月からは「放課後等デイサービス」へ移行し、現在に至っている。

2．コンセプトは「安心・安全・遊び」

「希望のひかり」には、特別支援学校や個別支援クラスに在籍している小1から高3生が、毎日20名ほど、放課後の時間を楽しみに来所している。自宅と学校の間だけを行き来する毎日に比べて、生活の幅が広がることは言うまでもない。さまざまな学校から、年齢の幅もある児童・生徒が一同に介する。ここにきて初めて友達ができたり、友達と一緒に語らったり、遊ぶ場ができたという子どもたちが多い。

子どもたちが多くの「学び」を得るのは、好きなこと・楽しいことに向かって進んでいる時である。そして、集団の中での互いの関わり、安心できる分かり易い環境、周囲の共感と理解などの全てが重なりあって、主体性と自己肯定感が培われる。

安心と安全が保証された上で、好きなことや得意なこと、興味・関心のあることが子どもの能

友達と一緒に

力を伸ばすのに最適であるという確信から、私たちは、A（安心）・A（安全）・A（遊び）、という「トリプルA」を基本指針に据え、ストレングスモデルを基盤にした個別支援を実施している。

3．ハコモノに地域を再現する！～実践から

施設の外となる地域には、生活のお手本となるモデルがたくさんある。20名のこどもたちを一度に移動させて連れて行くことは難しいが、アイデアと工夫次第で施設という「ハコモノ」の中にいかにして、余暇＝遊び＝学びを再現するかという挑戦が始まった。実践例を紹介する。

①運転シミュレーターから鉄道会社とのコラボ企画

ある保護者との面談での、「うちの子はバスの運転の動画をみているときは、集中力が持続するんです。」という一言がヒントになった。多くの乗り物系博物館でも順番待ちの長い列ができる「運転シミュレーター」を、施設内でも再現してみようと思い立ったのである。電車やバスの最前席でビデオに撮った映像を、プロジェクターで3m大のスクリーンに投影し、実際の運転席と同じ大きさの画面と音源を利用して流すことにした。完成して実施すると、子どもたちがこぞって運転手になりたいと集まってきた。

この活動を続けるうちにさらに気づいた。この地で暮らす子どもたちにとっては、自分の街の中を走っている日常の風景には京浜急行（京急）の赤い電車がある。彼らの京急への情熱は、あの赤い車両と同じくらい輝いていた。

子どもたちのところへ本物の京急がきたらどんなに喜ぶだろう。そこで、法人として京浜急行電鉄（株）に声をかけさせていただいたところ、同社の地域貢献活動の一環として、駅員さん二名とゆるキャラ「けいきゅん」が訪ねてきてくれた。当日は、テレビや地元紙の取材も入った。子どもたちの姿が報じられたことは、彼らにとっても貴重な経験に繋がったと感じている。ある生徒は、

京浜急行電鉄からCSR活動として来所

「希望のひかりに実際の駅長さんや『けいきゅん』が来てくれたことがうれしくて、天国にいるかのようで、夢みたいな一日だった」と語っている。

②ディスコの再現から発展・展開した取り組み

ある日のことであった。活動室のラジカセの音量が大きくなると、室内のさまざまなところに散っていた子どもたちが、それを聞いて立ち上がり、リズムに合わせて身体を動かす場面があった。そこで「ディスコルーム」を作り、活動の中に取り入れることにした。みんなで仮装をし、歌い、踊る。また、副次的な効果があることにも気づいた。運動不足の解消と気持ちの発散である。同じ音と場を共有することで、普段交わらなかった多くの子どもたちが一緒にダンスを楽しむ場面が生まれた。

③駄菓子屋さんから地域での買い物デビューに

子どもの頃、お金の計算を学んだのは近所にある駄菓子屋さんだったという経験がある方は多いと思う。「希望のひかり」でも数名の保護者から買い物体験の依頼があり、事業所内に「駄菓子屋さん」を開いて、実際のお金を払って買い物をする時間を作ることにした。

子どもたちは、通貨の概念はなくても、ジグ（固定用の器具）を使って必要な数の10円玉をはめ込み、手の中のお金が減っていくことで、残額0円＝終わり、の理解が可能となる。駄菓子屋さんでは、自分で好きなものを選んで、食べること

ディスコ

駄菓子屋さん

をとても喜んでいる。この経験が自信に繋がり、後日、地域で買い物デビューができたという報告を聞いたときは、大変うれしかった。

4．サービスやシステムの創出とインフォーマルな支援との連携

子どもたちが生活している環境は、「希望のひかり」だけではない。まず家庭があり、学校があり、私たちのような事業所や医療機関があり、行政や地域も含めて大勢の人たちが支えている。子どもを中心にしたその輪の中の一つを、放課後等デイサービスも担っている。

2014（平成26）年4月18日に、文部科学省と厚生労働省の連名で「児童福祉法の改正による教育と福祉の連携の一層の推進について」が発出された。「希望のひかり」でも従来から、関係者間で児童・生徒への共通認識と一体的なアプローチを行うために協議会に参加し、学校・行政・福祉・家庭との連携を取り、情報共有のネットワークづくりを率先して行ってきた。

協議会において、これまで見られなかったような地域のニーズにあったサービスやシステムの構築という視点と、インフォーマルなサービスをどれだけ発掘し、繋げていけるかということは今後の課題であると感じている。

5．「この子らは世のひかりです」

子どもたちの生活する場は本来、福祉施設でなく、家庭を中心とした地域の中で、さまざまな専門職でない人たちの手によっても支えながら、育まれるものであってほしいと思う。

「希望のひかり」に通う児童・生徒は、人間本来の自由な精神とオリジナルの個性を生き、ありのままの自己を体現している。

これは、幸いにも彼らと出逢うチャンスに恵まれ、人生の一部分を共有することができた人たちに共通する認識であると思うが、仕事を通して、こんなにも素晴らしい人々と接する機会が得られたことは、ありがたさ以外のなにものでもない。そのポイントは、国際的な知名度も高まったMOTTAINAI（=もったいない）という言葉に尽きる。少しの寛容さと優しさと理解が社会にあれば、それだけで彼らや家族が地域の中で暮らしやすくなるのだから。今後は、政治と経済、行政と教育、家庭と福祉のネットワークを広げていき、インフォーマルな地域の社会資源ともさらに結びつけていきたい。子どもたちの居場所を一つでも多くつくり、それらの点を線に、線を面に、そして地域での面を永続していけるような仕組みづくりを考えていきたいと思っている。